

タカクラ・テル（高倉輝）年譜（1891～1986）

2015年11月17日改訂 山野晴雄

年		歳		社会の動き
1891	明治 24	0	4月14日、高知県高岡郡口神川（くちごうのかわ）に生まれる。本名高倉輝豊。父輝房、母美弥。次いで同郡秋丸、のち幡多郡七郷村（ななさとむら）（現・黒潮町）浮鞭（うきむち）に定住する。 （戸籍では幡多郡七郷村大字浮鞭 33 番屋敷に出生とある）	
1896	29	5	村の助役を勤めたことがある父親がテルの年齢を普通より1年早くごまかして南郷尋常小学校に入学させる（当時の修業年限は4年）	
1900	33	9	入野高等小学校に入学（当時の修業年限は2年または4年）	
1902	35	11	入野高等小学校2年修了。愛媛県宇和島中学校を受験して合格。宇和島の叔父（美弥の弟）、眼科医の尾崎通信の書生となって通学。 一高生・藤村操の自殺に大きなショックを受け、人生を考えるには哲学の学習が必要と痛感。	5月22日、一高生・藤村操が日光華厳滝に投身自殺。
1907	40	16	宇和島中学5年卒業。医者になって金儲けをしろと主張する叔父と意見が合わず、1年間上級の学校をどこも受けず、家の手伝いをする。	
1909	42	18	親族の勧める岡山医学専門学校を受けると見せかけて、京都の第三高等学校を受験して合格。9月11日、三高へ入学（第一部乙類）。 平田禿木に英語、厨川白村に英文学を教わる。	6月1日、幸徳秋水ら検挙される。
1910	43	19	人生問題を解決するには哲学を勉強しなければならない、とドイツ語を必死で学習する。	1月18日、大逆事件判決、幸徳秋水死刑。
1911	44	20	5月、『新小説』懸賞論文2等入選。「日本の国民性と其の文学」。	
1912	45 大正 1	21	7月6日、第三高等学校卒業。 9月、京都帝国大学文学部英文科入学。 主任教授上田敏、言語学を新村出、ロシア語・ロシア文学を山口茂一に学ぶ。	
1915	4	24	卒業予定のところ、イギリス人教師と対立し、英語（シェイクスピア）の講義をボイコットし、卒業論文も出さなかったため、1年留年。 ロシア語教室で哲学科に入学した土田杏村と知り合う。	
1916	5	25	5月、ロシアの詩人バリモントが来日、山口茂一にかわってタカクラが接待する。 7月13日、京都帝国大学卒業。（卒業論文「グレゴリー夫人の作物」） 新村出教授の指導のもとで、京都帝国大学法科・国際私法研究室（主任・跡部定次郎）の嘱託となる。 （月給30円） 西田幾多郎・波多野精一などの講義に出て、哲学から入学した三木清と知り合いになる。	
1917	6	26	12月、「上方舞踊の危期」（『邦楽』創刊号）を発表。	ロシア、社会主義革命。
1918	7	27	3月～4月、「プーシキン評伝」（『芸文』）を発表。	7月～8月、米騒動。
1919	8	28	2月～4月、「バリモント詩抄」（『芸文』）を発表。 9月28日、ア・デ・ルードネフ著、山口茂一訳『蒙古文典』の翻訳に助力する。 10月1日、戯曲「砂丘」（『改造』）を発表（厨川白村が推薦の言葉を書いている）、初めて文壇に認め	2月、長谷川如是閑・大山郁夫ら、雑誌『我等』を創刊。 4月、雑誌『改造』創刊。

1920	9	29	られる。 1月、戯曲「焰まつり」(『我等』)を發表。 6月、「山口先生と自分」(『芸文』)を發表。 12月、戯曲「孔雀城」(『改造』)を發表。	10月2日、信濃黎明会 発足。
1921	10	30	5月10日、ロシア戯曲訳『心の劇場』(内外出版社) を出版。 6月、土田杏村から自由大学の相談を受ける。 指導教官・新村出の海外出張中に京都帝国大学の嘱 託をやめ、作家として独立。 9月、戯曲「切支丹ころび」(『改造』)を發表。 9月17日、父輝房、脚気のため、鶴来島で急死(63 歳)。 帰郷し、故郷にいる間にロシア語の教師・山口茂一 をモデルにした長編小説「蒼空」を書き始める。 このころから文壇の第3次「新思潮」の芥川龍之介 ・菊池寛・久米正雄らによる文壇からのボイコット が始まる。 12月1日～6日、信濃自由大学「文学論」(上田市 横町神職合議所、68名)。	11月1日、信濃自由大 学開講。
1922	11	31	1月15日、戯曲集『女人焚殺』(アルス)を出版。 9月ころ、安田津宇と婚約。 12月5日～9日、信濃自由大学「文学論」(県蚕業 取締所上田支所、63名)。 12月25日、安田津宇と結婚、長野県星野温泉にお ちつく。のち軽井沢千ヶ滝へ移る。	7月9日、森鷗外没。 7月15日、日本共産党 結成。 11月18日、アインシュ タイン来日。
1923	12	32	1月、東北文化学院「文学論」。 2月、文壇のボイコットによって、プラトン社から 「蒼空」の掲載を破約してくる。以後、北原白秋の 弟・北原鉄雄が社長をしていたアルスから単行本と して出版。 4月10日、戯曲集『海峡の秋』(アルス)を出版。 6月1日、長編小説『蒼空』(アルス)を出版。 6月30日、安田津宇との婚姻届出。 7月28日、評論集『我等いかに生く可きか』(アル ス)を出版。 8月6日～8日、魚沼自由大学「近代思潮論」(堀 之内小学校、約150名)。 8月6日、婦人のための講演「恋愛と家庭」。 8月11日～13日、岩船夏期大学で講演。 9月27日、長女信(のぶ)生まれる。 10月、長野県別所温泉常楽寺のはなれへ移住する。 10月末、信南自由大学設立につき横田憲治が訪ね てくる。 12月1日～5日、信濃自由大学「文学論」(県蚕業 取締所上田支所)。 12月16日、八海自由大学発会式「発会式に臨みて」 (伊米ヶ崎小学校)、講演「文学概論」。	1月、菊池寛、「文藝春 秋」発刊。 6月9日、有島武郎、心 中自殺。 9月1日、関東大震災。
1924	13	33	1月28日～2月1日、信南自由大学「文学論」(飯 田町江戸町正永寺、52名)。 2月1日、伊賀良村青年会で講演「イワンの馬鹿」。 6月15日、短編集『かうして嬰兒がこの世へ生れ た』(アルス)を出版。 8月10日、「自由大学に就て」(伊那自由大学パン フレット『自由大学とは何か』)を執筆。 8月15日、自由大学協会準備会を高倉輝宅で開く。 8月18日～22日、魚沼自由大学「文学論(ダンテ)」 (堀之内小学校、約100名)。	1月8日、信南自由大学 開講。 3月17日、LYL 検挙事 件。

1925	14	34	<p>9月18日、戯曲『長谷川一家』(アルス)を出版。 12月10日～15日、上田自由大学「文学論」(上田市役所)。 12月16日、松本自由大学発会式に出席(松本公会堂、約200名)、講演「二つの世界」。(猪坂直一も同行)。 1月8日～12日、伊那自由大学「文学論(ダンテ研究)」(飯田町天竜倶楽部、26名)。 1月8日、伊那自由大学公開講演「所感」(百十七銀行楼上)、(猪坂直一も同行)。 1月10日、「露西亜文学研究(プーシキン)」を『自由大学雑誌』に連載。 3月15日～17日、下伊那地方(千代、市田)へ講演。 6月6日、長編小説『阪』上巻(アルス)を出版。土佐にいる母美弥を迎えに行く。 9月20日、自由大学協会幹事会(別所温泉花屋ホテル)に出席。 9月27日、長男太郎生まれる。 12月1日～4日、上田自由大学「文学論」(上田市役所、30名)。</p>	3月、治安維持法、普通選挙法成立。
1926	15 昭和1	35	<p>1月10日、群馬自由大学発会式に出席(前橋臨江閣、150余名)、講演「文学の成立に就て」。(猪坂直一も同行)。 2月3日～6日、伊那自由大学「ダンテ研究(続講)」(飯田小学校、15名)。 2月23日～26日、群馬自由大学「文学論」(前橋男子師範学校)。 4月8日、長編小説『阪』下巻(アルス)を出版。 4月25日～27日、川口自由大学「文学論」(西川口小学校)。 11月4日、評論集『生命律とは何ぞや』(アルス)を出版。</p>	
1927	2	36	<p>この年別所温泉柏屋別荘主人斉藤房雄の好意で、本人設計の家を建て、別所温泉を永住の地と定める。 1月7日～15日、「大原幽学のこと思温荘雑話」を『信濃毎日新聞』に連載。 6月18日～12月31日、長編「高瀬川」を『都新聞』に連載。 10月9日、川口自由大学「文学論」(西川口小学校、約70名)。 12月10日、『世界童話集(上)』(日本児童文庫18、アルス)を出版。 12月20日、許可により輝豊を輝に改名。</p>	<p>5月、アルス「日本児童文庫」刊行開始。 5月、興文社「小学生全集」刊行開始。 7月24日、芥川龍之介自殺。</p>
1928	3	37	<p>2月9日、次女房(ふさ)生まれる。 2月、上田自由大学の再建に協力する。 2月、第16回衆議院総選挙(最初の男子普通選挙)に農民組合から立候補を勧められたが辞退する。 3月14日～16日、上田自由大学「日本文学研究」(上田図書館、60名)。 4月14日、上小農民組合連合会結成式に出席(上田市公会堂)、講演「耕す者は永遠である」。 5月21日、青木村農民組合結成式(修那羅山)で記念講演。 6月18日～21日、「インテリゲンチアとは何か」を『都新聞』に連載。 12月1日～4日、伊那自由大学「日本民族史」。</p>	<p>2月、第16回衆議院総選挙(普選の実施)。 3月15日、共産党員の全国的検挙(3・15事件)。</p>

1929	4	38	<p>1月10日、『チェーホフ集』（近代劇全集 28、第一書房）を出版。</p> <p>2月28日、妻津宇の従兄山本宣治、別所温泉の高倉輝宅を訪れ、津宇と8年ぶりの再会。</p> <p>3月1日、上小農民組合連合会第2回大会に出席（上田市公会堂）、講演「農民運動の意義」、山本宣治「無産政党代議士の議会観」。</p> <p>3月5日、山本宣治、暗殺される。</p> <p>3月5日、「耕す者は永遠である」（『伊那自由大学』第1号）を発表。</p> <p>3月6日、山本宣治死去の報をうけ上京。</p> <p>3月8日、山本宣治の告別式（東京本郷仏教青年会館）に参列。</p> <p>3月14日、上田自由大学での講義を延期。</p> <p>3月15日、上小農民組合連合会「山本代議士追悼大演説会」（上田市公会堂）で「山本の一生及び凶刃に倒れたる最期より葬儀に列せる事実の報告」を報告。</p> <p>4月2日、和（かのう）農村研究会の創立記念講演会（和小学校講堂）で講演。</p> <p>5月15日、『山本宣治全集』全8巻（安田徳太郎・高倉輝編集、ロゴス書院）を刊行。</p> <p>秋、別所温泉のために、長唄「風流七苦離乃里」を作詞。</p> <p>10月5日、『印度童話集』（日本児童文庫 14、アルス）を出版。</p> <p>12月6日～9日、上田自由大学「日本文学研究」（海野町公会堂、28名）。</p> <p>12月20日～22日、伊那自由大学「日本民族史研究」。</p>	4月16日、共産党員の大検挙（4・16事件）。
1930	5	39	<p>1月28日、「農民運動のラッパ吹き拜命」（『上田毎日新聞』）を発表。</p> <p>1月31日、東信無産派選挙対策委員会結成式（上田市公会堂）で執行委員長に選出される。</p> <p>5月1日、山本宣治記念碑除幕式が高倉輝宅の庭先で行われる。</p> <p>7月2日～9月5日、「百姓の唄」を『都新聞』に連載。</p> <p>9月9日、次男次郎が生まれる。</p> <p>11月2日、全国農民組合西塩田支部結成式（西塩田村新町劇場）で演説。</p> <p>西塩田村小作争議始まる。</p> <p>11月20日、『高瀬川』（ロゴス書院）を出版。</p>	9月28日、全農上小地区委員会発足。 11月23日、「全農長野県聯、旧上小農聯合同声明書」発表。
1931	6	40	<p>2月12日、全農上小地区委員会第1回大会開催について高倉輝宅で打合会を開く。</p> <p>5月1日、次男次郎、発育不全のため死亡。</p> <p>8月、伊東三郎の紹介で守屋典郎が訪ねてくる。3か月間常楽寺のはなれに住む。</p> <p>9月12日、共産党の裁判を傍聴、弁護士会館で秋田雨雀と会う。</p> <p>10月30日、三女友（とも）生まれる。</p> <p>11月11日、日ソ文化協会（前ソヴェート友の会）主催のソ連北極探検隊歓迎会に出席。</p>	9月18日、柳条湖事件（「満州事変」起こる）。
1932	7	41	<p>1月5日、全農上小地区委員会主催「西塩田村小作争議批判演説会」（西塩田村新町劇場）、高倉輝「寺と質屋」、布施辰治「西塩田村小作争議の展望」。</p> <p>1月17日、全農別所支部、女工委員会を結成。この女工委員会の組織化に関係する。</p>	

			<p>1月、共産党の拡大のため守屋典郎が真栄田（松本）三益とともに訪ねてくる。</p> <p>2月25日、三女友、肺炎で死亡。</p> <p>3月25日、西塩田村小作争議、調停交渉が行われ、農民組合側の勝利で解決。</p> <p>3月、高倉輝を慕って関口龍夫一家が常楽寺の別荘に6か月間移り住む。</p> <p>4月16日～19日、「亡児を悲む記」を『都新聞』に連載。</p> <p>8月6日～11月16日、長編「狼」を『都新聞』に連載。（検閲によって中断される）</p> <p>11月13日、布施辰治宅での晩餐会に参加。山崎今朝弥・安田徳太郎・秋田雨雀ら。</p>	<p>5月15日、犬養毅首相射殺される（5・15事件）。</p>
1933	8	42	<p>1月13日、上田市の全農上小地区事務所で15日のカール・リプクネヒト、ローザ・ルクセンブルク記念日計画打ち合わせ、各情勢報告等の会合中に検束される。</p> <p>2月3日、三男三郎生まれる。</p> <p>2月23日、「2・4事件」で農民組合員とともに上田署に検挙される。6か月間面会なし。</p>	<p>4月、滝川事件。</p> <p>6月、佐野学・鍋山貞親転向声明。</p>
1934	9	43	<p>9月15日、新聞記事解禁と同時に、長野署にまわされ、はじめて妻津宇との面会を許され、その日のうちに長野刑務所に入る。</p> <p>10月、家族は長野県外へ追放となり、東京市滝野川区滝野川町1841へ移る。</p> <p>7月30日、長野刑務所から釈放され、東京の家へ帰る。</p> <p>東京地裁で懲役2年の判決を受け、ただちに控訴、執行猶予3年の判決が下る。</p>	
1935	10	44	<p>1月14日、「高倉君の夕」が山水楼で開かれ、秋田雨雀・安田徳太郎・岡田道一二・三木清・藤森成吉・河崎なつ・田村栄・上泉秀信・北原鉄雄・徳永直ら約20人が集まる。</p> <p>このころ高橋貞樹の執行停止運動、義援金募集運動を行う。</p> <p>2月18日～20日、「味噌」を『都新聞』に連載。</p> <p>7月1日、「糞の話」（『文学評論』）を発表。</p> <p>9月1日、「文学当面の問題」（『文学評論』）を発表。</p> <p>はじめて筆名を輝からテルに変える。</p> <p>9月23日～27日、「秋風たつ」を『都新聞』に連載。</p> <p>11月1日、「農民文学の意義、任務」（『文学評論』）を発表。</p> <p>11月4日、高橋貞樹の告別式に参列する。</p> <p>12月1日、「国語国字問題の意義」（『唯物論研究』）を発表。</p> <p>このころまでに国語国字・漢字制限の問題を研究するかたわら、国語協会・カナモジ会、日本ローマ字会の会員となる。</p> <p>この年、のちのゾルゲ事件の関係者、宮城与徳と会う。</p>	
1936	11	45	<p>1月、築地小劇場後援会機関誌『観客』の編集に参加。</p> <p>1月19日～21日、社会時評「史的角度より」を『都新聞』に連載。</p> <p>2月、2・26事件のさい、大田典礼と赤坂見附付近を歩き、情報を収集する。</p> <p>4月、長女信が神奈川県立平塚高等女学校へ入学するため、神奈川県中郡国府村生沢87へ移る。</p>	<p>2月26日、2・26事件。</p>

1937	12	46	<p>5月1日、「綴方教育の根本問題」(『教育』)を發表。 6月13日～16日、「農村に移り住んで」を『都新聞』に連載。 8月、神奈川県中郡大磯町東小磯316へ移る。 8月～9月、「日本国民文学の確立」(『思想』)を發表。 12月20日、『尊徳読本』(人生読本第2巻、建設社)を出版。 12月25日、『芭蕉読本』(人生読本第1巻、建設社)を出版。 12月30日、『綴方教育の根本問題』(東京帝国大学学生ローマ字会)を出版。タカクラ・テルの筆名をはじめて使う。 この前後に佐藤正二と知り合う。 1月20日、『松蔭読本』(人生読本第3巻、建設社)を出版。 1月20日、『日蓮読本』(人生読本第5巻、建設社)を出版。 2月1日、「正しいカナズカイ」(『地方文化』創刊号)を發表。 2月20日、『良寛読本』(人生読本第4巻、建設社)を出版。 3月、「ローマ字運動の過去・現在・未来」(『文字と言語』第11号)を發表。 4月1日、『益軒読本』(人生読本第6巻、建設社)を出版。 7月1日、「日本語再建」(『中央公論』)を發表。 9月1日、「漢字わ日本にだけ残るか?」(『中央公論』)を發表。 9月1日、「自由大学運動の経過とその意義」(『教育』)を發表。 9月27日、新築地劇団1937年度決算総会で文芸顧問団の一人に選ばれる。 10月1日、「ミイラ・取りの話」(『国語運動』)を發表。</p>	7月7日、盧溝橋事件(日中戦争始まる)。
1938	13	47	<p>11月1日、「教師と教養」(『生活学校』)を發表。 1月25日、『良寛読本』(人類読本第5巻、建設社)を出版。 1月25日、『益軒読本』(人類読本第6巻、建設社)を出版。 3月27日～30日、「日支同文の意義」を『都新聞』に連載。 4月1日、「支那事変と国語教育」(『教育』)を發表。 4月27日～29日、戯曲「子もり良寛」が新築地劇団第10年記念第一公演として新宿第一劇場で上演される。千田是也演出、薄田研二・山本安英ら。 4月28日、「国語問題と綴り方教育」(『国語・国語教育』臨時号)を發表。 6月1日、「綴り方教育の本質」(『教育』)を發表。 6月1日、「偉大な日本人 大原幽学」(『家の光』)を發表。 8月21日、鎌倉姥ヶ谷の別荘に滞在中の西田幾多郎を訪ねる。 10月1日、「アジアの思想とアジアの言葉」(『思想』)を發表。 10月1日、「世界最初の産業組合創設者 大原幽学」(『国民思想』)を發表。 10月28日、『一茶の生涯とその芸術』(ルミノ出版社)を出版。</p>	
1939	14	48	<p>1月10日、『大原幽学』(東邦書院)を出版。</p>	

			<p>2月17日、国語協会文芸部世話人会に出席。 2月19日、『ミソ・クソ・その他』（厚生閣）を出版。 3月8日、国語協会文芸部発会式兼第一回例会に出席。 4月1日、「農村教育論」（『教育・国語』）を發表。 5月1日、「農村共同組合の提唱」（『中央公論』）を發表。 6月1日、「日本語の問題」（『中央公論』）を發表。 6月1日、西田幾多郎「学問的方法」をローマ字書きで紹介（『中央公論』）。 6月5日、革命的ローマ字運動事件で黒滝雷助・平井昌夫・大島義夫らとともに高輪署に検挙される。 7月1日、「大原幽学」（『中央公論』）を發表。 7月1日、「沖縄県人の姓」（『国語運動』）を發表。 7月26日、国語協会臨時理事会において、大島義夫・鬼頭礼蔵・黒滝成至・高倉テル・平井昌夫の除名が決定される。 12月、釈放となり、不拘束のまま起訴される。検挙と同時に家主から立ち退きを迫られ、家族は大磯町山王町へ移る。</p>	
1940	15	49	<p>3月19日、『大人の読本』（厚生閣）を出版。 4月25日、『大原幽学』（建設社）を出版。 11月、（古在由重、唯物論研究会事件で釈放になる）このころから三木清の家で碁会が開かれる。古在由重・渡部義通・大内兵衛・松本慎一、横田喜三郎・唐木順三・高倉テルら。 このころから毎月1回、横浜の検事局（横浜思想犯保護観察所）に出頭する。 12月31日、長編小説『大原幽学』（アルス）を出版。</p>	
1941	16	50	<p>2月18日、鎌倉姥ヶ谷の別荘に滞在中の西田幾多郎を訪ねる。3月、9月、10月にも訪ねる。 3月15日、「日本語の文法を」（『読売新聞』）を發表。 3月18日、「国民文学の樹立へ」（『読売新聞』）を發表。 3月25日、『大原幽学伝』（建設社）を出版。 4月、道路改修で家が立ち退きとなり、大磯町坂田山934番地へ移る。 4月12日～14日、「大原幽学と天保水滸伝」を『都新聞』に連載。 5月25日、「地方文化について」（『上毛新聞』）を發表。 このころ東宝の衣笠貞之助監督から「大原幽学」映画化の申し込みがあったが、方言の問題で意見が合わず、取りやめになった。 9月1日、「西行」（『中央公論』）を發表。 9月10日、『大原幽学伝』（アルス）を出版。 10月、「大原幽学」を金井修一座が劇化（小崎政房監督）。 11月1日、「青銅時代」（『中央公論』）を發表。 12月26日、革命的ローマ字事件第一審判決で、懲役2年、執行猶予5年を言い渡される。 12月28日、『本居宣長』（子供のための伝記、小学館）を出版。</p>	<p>10月14日、ゾルゲ事件関係者の検挙が始まる。 12月8日、米・英に宣戦布告（アジア・太平洋戦争始まる）。</p>
1942	17	51	<p>この年から翌年にかけて箱根用水の研究が進む。 1月1日、「グラフ特集 生まれかわる日本農村」（『中央公論』）を發表。写真土門拳。 2月～5月、「日本農業の進む道」を『中央公論』</p>	

1943	18	52	<p>に連載。話し手前橋真八郎、聞き手高倉テル。 2月13日～17日、金井修一座、浅草花月劇場で「大原幽学」を上演。東海・関西地方巡演。 5月20日、「新しい農民だまし」(『早稲田大学新聞』)を発表。 6月、ゾルゲ事件の宮城与徳との関係で、松本慎一らの意見を聞いて警視庁に出頭、巢鴨刑務所に入る。40日後に釈放される。 1月～5月、「箱根用水の話」を『中央公論』に連載。 6月、移動劇団とともに朝鮮へ渡り、1か月間、前線各地を視察して帰る。 7月、大都映画の小崎政房監督から「大原幽学」映画化の希望があり、脚本も完成したが、実現にいたらなかった。</p>	6月16日、司法省、ゾルゲ事件を公表。
1944	19	53	<p>5月10日、野田宇太郎が訪ねてくる。 6月4日、『ニッポン語』(北原出版、もとのアルス)を出版。 11月1日、「標準語確立の絶好の機会」(『少国民文化』)を発表。</p>	
1945	20	54	<p>11月23日、久保田無線厚生農場事件で岡林キヨ・関口龍夫らとともに検挙される。 3月6日、警視庁より脱走。 3月21日、埼玉県入間郡豊岡町石川源一郎方で検挙される。 3月25日、巢鴨刑務所に送られる。 3月28日、高倉テルをかくまった容疑で三木清・山崎謙・中条登志雄検挙される。 7月17日、空襲によって、坂田山の家が全焼、大磯町神明町へ移る。</p>	8月15日、「終戦」玉音放送(敗戦)。 9月26日、三木清、豊多摩刑務所で獄死。
1946	21	55	<p>9月、A級戦犯収容のため、巢鴨刑務所から豊多摩刑務所に移される。 10月1日、豊多摩刑務所から釈放される。 10月15日、松本一三・志賀義雄の紹介で日本共産党に入党する。 11月8日、共産党「党大会の準備のための全国協議会」(国分寺・自立会館)に参加。 11月、長野県別所温泉の柏屋別荘主人斉藤房雄に招かれて、13年ぶりに長野県に入る。 11月27日、「うつりかわり」(『信濃毎日新聞』)を発表。 12月1日～3日、共産党第4回党大会(党本部) 12月15日～16日、共産党長野県党組織再建のための会議に参加(松本・浅間温泉尾上の湯)。 12月20日、「上田自由大学趣意書」を発表。 12月24日、共産党長野県地方委員会、総選挙立候補者に高倉テルを推すことに決定。 12月27日～29日、上田自由大学「文学論」(上田市鷹匠町公会堂)。 2月16日、神奈川県中郡大磯町大磯884より長野県小県郡別所村大字1754へ転籍届け出。 2月24日～26日、共産党第5回党大会(東京・京橋公会堂)。 3月11日～4月10日、第22回総選挙に長野県から立候補、53,379票を獲得して当選。 4月13日～14日、共産党第3回県党会議(松本・浅間温泉玉の湯)。高倉テルを校長とする党学校の設立を決める。</p>	

1947	22	56	<p>4月16日、共産党上田支部委員会に出席。 5月3日～4日、上田自由大学「文学論」（商工経済会上田支部）。 6月4日～7月4日、「塩尻農民委員会」を『文化評論』に連載。 8月1日、「天皇制ならびに皇室の問題」（『中央公論』）を発表。 9月1日、三木清の遺児洋子にあてた「知識の良心」（『世界』）を発表。 10月1日、「山本宣治の死」（『政界ジープ』）を発表。 10月19日～20日、共産党第5回県党会議（松本市公会堂）。県地方委員に選出される。 10月28日～11月3日、「ことばと文学」を『アカハタ』に連載。 11月3日～9日、議会報告会を野沢・白田・小諸・岩村田・望月・松代・篠ノ井・長野などで開く。 11月26日、上田自由大学懇談会（柏屋別荘）に出席。 3月31日～4月25日、第23回総選挙に長野2区から立候補、落選。 5月2日、母美弥死去（80歳）。 8月1日、「愛と死について」（『中央公論』）を発表。 8月3日、長野県勤労文化連盟結成大会（長野市教育会館）。幹事長藤森成吉、顧問森田草平・石井柏亭・林広吉・高倉テル・有島生馬・今井登志喜ら。 9月5日、『青銅時代』（中央公論社）を出版。 9月25日、『ニッポン語』（世界画報社）を出版。 12月21日～23日、共産党第6回大会（東京・京橋公会堂）。中央委員に選出される。</p>	11月3日、日本国憲法公布。
1948	23	57	<p>1月～11月、「ハコネ用水」を『大衆クラブ』に連載。 1月10日、上小地区労文化部主催文化講演会・軽音楽の夕（上田商工ビル）で講演。 2月5日、参議院長野地方区補欠選挙に立候補、落選（99,724票）。 2月10日、『ミソ・クソ・その他』（美知書林）を出版。 4月16日～21日、「ナガノ県参議院補欠選挙のけいけん」を『アカハタ』に連載。 4月30日、『我等いかに生くべきか』（八雲書店）を出版。 5月4日、森田草平に共産党入党を勧める。 6月30日、『えんげき集 エンマ大王』（文化評論社）を出版。 9月25日、長編小説『大原幽学（上）』（美知書林）を出版。 10月20日、長編小説『大原幽学（下）』（美知書林）を出版。 11月5日、『女』（改造社）を出版。 11月20日、『ニッポンの農業』（黄土社）を出版。 11月20日、長野県南佐久郡田口村での演説が占領政策違反容疑とされ、北佐久郡中込町の中込機関区で懇談中にアメリカ軍に逮捕され、上田署に留置される。 11月21日、上田警察署に対し200名が釈放要求デモを行う。 12月6日、半月も取り調べもなく、マッカーサー元帥宛の抗議文と家族への遺書を残して、ハンストに入る。</p>	1月31日、GHQ、2・1ゼネスト中止を命令。 5月3日、日本国憲法施行。

1949	24	58	<p>12月8日、森田草平、高倉逮捕について「アップール」を發表。</p> <p>12月12日、森田草平・野間宏ら、お茶の水駅前が高倉テル釈放署名を市民に訴える。若月俊一・田中策三・高倉太郎ら面会、高倉テル、輸血を承諾する。</p> <p>12月13日、小県地区（上田）警察署から療養のため仮釈放される。佐久病院に入院、その後自宅で療養。佐久病院入院中に無罪釈放となる。</p> <p>1月1日、「あらしは強い木をつくる」（『アカハタ』）を發表。</p> <p>1月10日、『大原幽学伝』（美知書林）を出版。</p> <p>3月3日～4日、前進座での懇談会に出席。タカラ・テル・増山太助・宮森繁・河原崎長十郎ら。</p> <p>3月7日、前進座入党式に出席。</p> <p>3月9日、「前進座の入党」（『アカハタ』）を發表。</p> <p>4月～10月、「狼」を『世界評論』に連載。</p> <p>4月10日、『うたえ、わかもの』（民主青年出版部）を出版。</p> <p>5月15日、『愛と死について』（日本出版）を出版。</p> <p>9月、前進座の中村翫右衛門ら”創作班”、平田兼三作「ヤジ・キタ」、高倉テル作「エンマ大王」で巡演。</p> <p>9月、茨城県水海道町に風見章を訪ねる。</p> <p>12月～50年3月、「ハコネ用水」を『潮流』（潮流社）を連載。</p> <p>12月16日、「モリタ・ソーヘーさんの死」（『アカハタ』）に發表。</p>	<p>1月23日、第24回総選挙、共産党35議席獲得。</p> <p>8月、松川事件。</p>
1950	25	59	<p>1月1日、「共産党員のことば」（『新しい世界』第30号）發表。</p> <p>2月15日、『ハコネ用水の話』（理論社）を出版。</p> <p>4月15日、『うたえ わかもの』（暁明社）を出版。</p> <p>京都市長選に高山義三社共統一候補の応援に行き、当選させる。</p> <p>6月5日、第2回参議院選挙に全国区から立候補、158,797票を獲得して当選。</p> <p>6月6日、GHQの指令により日本共産党中央委員24名の公職追放が行われ、参議院議員を失格となる。</p>	<p>1月6日、コミンフォルム機関誌『恒久平和と人民民主主義のために』、オブザーバー署名の論評「日本の情勢について」を發表、いわゆる50年問題起こる。</p> <p>6月25日、朝鮮戦争勃発。</p> <p>6月～8月、ソビエト言語学界の論争で、スターリンが「マルクス主義と言語問題」を『プラウダ』に發表し、マール派を批判。</p> <p>8月末、徳田球一・西沢隆二が北京へ渡る。その後、野坂参三らも出国、「北京機関」がつくられる。</p>
1951	26	60	<p>11月1日、「人民に仕える文学」（『人民文学』）を發表。</p> <p>1月1日、「ぶたの歌」（『人民文学』）を發表。</p> <p>3月5日、『ハコネ用水』（理論社）を出版。</p> <p>5月1日、「わたしのあるいてきた道」（『人民文学』）を發表。</p> <p>5月25日、「言語もんだいの本質」（『季刊理論』第16号）を發表。</p> <p>6月20日、『新文学入門』（理論社）を出版。 （9月、伊藤律とともに中国へ亡命。）</p> <p>10月1日、『愛と死について』（葦会）を出版。</p>	<p>9月8日、サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約調印。</p>

			10月15日、『ニッポンの女』(理論社)を出版。 10月20日、『版画とローマ字 ぶたの歌』(理論社)を出版。 11月17日、北京に到着(伊藤律、土橋一吉同行)。	11月1日、出入国管理令施行。
1952	27	61	2月10日、『新ニッポン語』(理論社)を出版。 2月26日、新星プロ(新星映画社)第2回作品「箱根風雲録」完成。監督山本薩夫、主演河原崎長十郎・山田五十鈴・中村翫右衛門・轟夕起子。 6月5日、『高瀬川』(タカクラ・テル名作選1、理論社)を出版。 7月5日、『百姓のうた・狼』(タカクラ・テル名作選2、理論社)を出版。 8月5日、『チェホフ戯曲集』(タカクラ・テル名作選6、理論社)を出版。 9月10日、『文学論・人生論』(タカクラ・テル名作選5、理論社)を出版。 10月5日、『日本の封建制』(タカクラ・テル名作選4、理論社)を出版。 10月10日、『新文学入門』(増補新版、理論社)を出版。 11月5日、『大原幽学』(タカクラ・テル名作選3、理論社)を出版。 12月、I. リヴォーフの評論「ハコネ用水ーニッポンの進歩的な文学の傑作」が雑誌『ソビエト文学』に発表される。	
1953	28	62	ソ連作家同盟機関誌『新しい世界』第2号にV. ログノーフ訳「ぶたの歌」が掲載される。コンスタンチン・シーモノフ「小さな短編が語る大きな真実ータカクラ・テルの「ぶたの歌」について」を発表。	10月24日、徳田球一、北京で病死。
1954	29	63	小説「ハコネ用水」、ロシア語に翻訳される(I. リヴォーフ訳)。	
1955	30	64	4月30日、「日本国民文学の確立」(『日本プロレタリア文学』第7巻、三一書房)が掲載される。 11月8日～56年4月、中国国内を旅行。	7月27日～29日、共産党第6回全国協議会(六全協)
1956	31	65	小説「百姓の歌」、「農民之歌」という題で中国語に翻訳される(金福訳)。 小説「狼」、中国語日本訳される(金福訳)。	
1957	32	66		
1958	33	67	小説「ハコネ用水」、「箱根風雲録」という題で中国語に翻訳される(肅肅訳)。 10月7日～11日、第1回アジア・アフリカ作家会議(ウズベック共和国タシケント)に出席。日本代表団伊藤整を団長に野間宏ら7人の文学者が出席。	
1959	34	68	4月15日、羽田着のインド航空機でチェコスロバキアのプラハから帰国。袴田里見・蔵原惟人・伊井弥四郎・細川嘉六・風見章・高野実ら約100名が出迎える。警視庁より出入国管理令違反の容疑で逮捕される。 4月18日、警視庁から釈放される。青柳盛雄・松本三益・高倉太郎らの出迎えをうける。代々木の党本部を訪れ、宮本顕治書記長と会う。 5月4日、帰国歓迎会(上田公会堂)に出席。 5月7日～6月2日、第5回参議院選挙に長野地方区から立候補、落選(65,517票)。 5月24日、「中国あちこち」(『週間わかもの』)でぬやま・ひろしと対談。 5月25日、「わかい人たち」(『アカハタ』)を発表。 6月1日、「国外脱出九年間」(『文芸春秋』)を発表。 9月19日、共産党文化部主催「高倉テル氏をかこ	

1960	35	69	<p>む集会」(新宿中村屋)。秋田雨雀・本多秋五・本郷新・丸木位里・丸木俊子・佐藤忠良・朝倉撰・松山樹子・山崎謙・高野実・蔵原惟人。</p> <p>9月、小説「狼」、ロシア語に翻訳される(G. ロンスカヤ訳)。</p> <p>9月23日、「反戦運動のために中国で命をうしなったニッポン人について」(『アカハタ』)を發表。</p> <p>10月17日、出入国管理令違反事件東京地裁第1回公判で冒頭陳述をする。</p> <p>1月12日～15日、「タシケント精神」を『アカハタ』に連載。</p> <p>1月24日、高知県中村市(現・四万十市)での幸徳秋水刑死50年祭に出席。</p> <p>2月18日～3月2日、高知県日教組の勤評闘争を応援するため、高知県を東から西へ横断旅行。</p> <p>3月15日、共産党長野県委員会労働学校第1回講座(長野市福社会館)で校長として開会の挨拶をする(「どー学習するか?」)。</p> <p>8月、横田基地のそばでの生活を体験するため、昭島市上川原町250(現・昭和町4-6-9)に移転する。</p> <p>8月4日～9月22日、「九年ぶりに見たもの」を『アカハタ』日曜版に連載。</p> <p>11月3日、ハンガリーのトルストイ・メモリアル原稿として「大トルストイから学んだもの」を執筆する。</p> <p>12月、「たまをあらそう」を『アカハタ』日曜版に連載。</p>	1月19日、日米新安全保障条約調印。
1961	36	70	<p>5月24日、出入国管理令違反事件、東京地裁(山岸薫一裁判長)で懲役3カ月、執行猶予2年の判決。</p> <p>7月1日、「不当な裁判に抗議する」(『前衛』)を發表。</p> <p>7月25日～31日、共産党第8回党大会(世田谷区民会館)。綱領討議で代議員として発言(「愛国的文化人を結集 文化面から綱領の正しさを確認」。中央委員に選出される)。</p> <p>9月22日、秋田県田沢湖町神代「わらび座」で、「ニッポン演芸の民族的要素について」と題する講演をする。</p> <p>10月1日、「日本文化の民族性から綱領の正しさを証明する」(『前衛』)を發表。</p> <p>12月23日、「カザミ・アキラ(風見章)さんの死」(『アカハタ』)を發表。</p>	12月20日、友人風見章死去(75歳)。
1962	37	71	<p>1月1日、「ニッポン演芸の民族的要素について」(『前衛』)を發表。</p> <p>1月27日、東京労音主催「第1回伝統音楽全国集会」で、田辺尚雄・町田嘉章らとともに講演。演題は「ニッポン民族とニッポン音楽」。</p> <p>5月15日、秋田雨雀の葬儀に参列。</p> <p>5月16日、「アキタ・ウジャク(秋田雨雀)さんの死」(『アカハタ』)を發表。</p> <p>6月1日、「植民地文化とのたたかい」(『学習の友』)を發表。</p> <p>6月14日、民族芸能を守る会発足。「民族芸能の会」を上野本牧亭で開く。窪川鶴次郎・松島栄一・原太郎・加太こうじ・稲岡進・三島一ら出席。会長タカクラ・テル、副会長小生夢坊・三島一。</p> <p>6月23日、「民族芸能を守る座談会」(『アカハタ』)。林家正蔵・岡本文弥・田辺南鶴・一龍齋貞花・大空ヒット・三空ますみ・小生夢坊・石井英子・タカクラ・テル。</p>	

1963	38	72	<p>12月1日、共産党中央委員会幹部会、東京都知事選に高倉テルの擁立を決定。東京都議会議事部長室で野坂参三・春日正一とともに記者会見。</p> <p>12月、小説『たまをあらそう』（理論社）を出版。</p> <p>1月10日、共産党東京都委員会主催「高倉テル氏をはげます1963年赤旗びらき」（東京白金・八芳園）に出席。</p> <p>1月10日、「ゼアミ（世阿弥）の現代的意義」（『文学』）を発表。</p> <p>2月17日、東京労音主催「第2回伝統音楽研究集会」で基調報告を行う。</p> <p>2月27日、高倉テル後援会結成式（学士会館）。坂本徳松・榎田ふき・三島一・帯刀貞代・尾崎陞・岡本文弥・山本薩夫・丸木俊子ら約150名出席。</p> <p>3月9日、社会党・共産党両党間の了解が最終的に成立、都知事選に阪本勝を共同推薦することになり、立候補を辞退。（3月15日に文書を発表）</p> <p>5月、日中友好協会の副会長となる。</p> <p>6月1日、出入国管理令違反事件、控訴審第1回公判。</p> <p>7月1日、「芸術における愛国主義と国際主義の統一」（『月刊学習』）を発表。</p> <p>7月、『ハコネ用水』（新装版、理論社）を出版。</p> <p>8月1日、「新しい共産主義と新しい厭世主義」（『月刊学習』）を発表。</p>
1964	39	73	<p>1月1日～4日、「対談 たつ年よもやま話」を『アカハタ』に連載。タカクラ・テル、橋浦泰雄。</p> <p>2月2日～4月19日、「農民闘争実録 長野県西塩田小作争議」を『アカハタ』日曜版に連載。</p> <p>5月14日、「佐藤春夫さんのこと」（『アカハタ』）を発表。</p> <p>7月11日、全国労音第3回研究集会で、基調報告（「ニッポン音楽の歴史的特色とこれからの方向」）を行う。</p> <p>9月1日、「ニッポン音楽の歴史的特色とこれからの方向」（『月刊労音』）を発表。</p> <p>10月24日、民族芸能を守る会の訪中代表団を羽田空港に見送る。</p> <p>11月24日～30日、共産党第9回党大会（大田区民会館）。中央委員に選出される。</p> <p>これ以後、幕末から明治にかけて三多摩で活躍した車人形（地元・昭島市の造り酒屋石川家の職人・柳吉が考案した一人使いの人形。のち柳吉は八王子に移る）と結びつき、3代目古柳と近づきになる。</p>
1965	40	74	<p>1月28日、出入国管理令違反事件、控訴審（東京高裁、渡辺好一裁判長）判決で控訴棄却となる。4月18日、「老舎・劉白羽の両氏にきく 日中両国作家の友好と社会主義革命時代の中国文学」（『アカハタ』）。聞き手タカクラ・テル。</p> <p>6月16日、車人形のための新曲じょうり「佐倉義民伝（甚兵衛わたし場の段）」を執筆。邦楽家平井澄子、テルの援助で民族楽団「ふきの会」を結成。</p> <p>8月26日、（日本民主主義文学同盟創立大会）「新文学団体へのよびかけ」にこたえ参加を承諾。</p> <p>10月1日、東京労音10周年記念依頼作品として「歌劇 山城・国一揆」（『月刊労音』）を発表。</p> <p>10月14日～11月23日、全国労音の統一企画として「歌劇 山城・国一揆」を全国の労音で巡演。脚色村山知義、作曲小山清茂、出演多々良純・浮田左</p>

1966	41	75	<p>武郎・森幹太・滝沢三重子・中沢桂・成田絵智子・岡村喬生。</p> <p>1月1日、「座談会『山城・国一揆』をめぐって」(『歴史評論』)。高倉テル・鈴木良一・松島栄一。</p> <p>2月1日、車人形のための音楽劇「新曲まんざい」を執筆。</p> <p>5月、江州音頭による「おんど『山城・国いつき』」を執筆。</p> <p>9月13日、出入国管理令違反事件、最高裁第三小法廷、上告を棄却(懲役3カ月、執行猶予2年の刑が確定)。</p> <p>10月4日、「民族伝統の問題」(『赤旗』)を発表。</p> <p>10月24日～30日、共産党第10回党大会(世田谷区民会館・大田区民会館)。中央委員に選出される。</p>	5月16日、中国文化大革命始まる。
1967	42	76	<p>1月13日、車人形のためのパンフレット『新曲さんしょう太夫』を刊行。</p> <p>3月30日、日中友好協会笠原千鶴会長の死去にともない会長代行となる。</p> <p>4月14日、車人形のための新作じょうり「唐人お吉」を執筆。</p>	2月、日中友好協会本部襲撃事件起こる
1968	43	77	<p>2月23日、「軍国主義と『かたりもの』」(『赤旗』)を発表。</p> <p>6月20日、『研究資料I ニッポン語』(民族楽団「ふきの会」)を刊行。</p> <p>9月14日、「新曲ツルの巣ごもり」を執筆。</p> <p>9月27日、東京労音9月例会(サンケイホール)で「ツルの巣ごもり」が初演される。「かたり」(詩)タカクラ・テル、作曲清瀬保二、演奏辻久子(バイオリン)、平井澄子・坂井敏子(箏)、大塩寿美子(十七弦)、語り成田絵智子。</p>	8月17日、恩師新村出死去(92歳)。
1969	44	78	<p>2月13日、「一弦琴」(『赤旗』)を発表。</p> <p>5月11日、函館労音がベトナム民主共和国の全国労音代表団をつうじベトナム人民に新曲「さくら」を贈る。作詩タカクラ・テル、作曲平井澄子。</p>	
1970	45	79	<p>2月1日、「人生問題から社会問題のナヤミへ」(『前衛』)を発表。</p> <p>3月15日、「民族と文化」(全学連中央執行委員会出版部編『知識人・文化論』全学連出版部)を発表。</p> <p>7月1日～7日、共産党第11回党大会(東京都立川社会教育会館・世田谷区民会館)。中央委員に選出される。</p>	
1971	46	80	<p>1月1日、小説『大原幽学』(東邦出版社)を出版。</p> <p>1月28日、妻津宇(ツウ)死去(71歳)。</p> <p>2月20日、『民族芸能の話(1)』(函館労音文芸学院)を出版。</p> <p>3月1日、『箱根用水』(東邦出版社)を出版。</p> <p>5月23日、『民族芸能・作品集(1)』(函館労音文芸学院)を出版。</p> <p>9月、アニメーション映画「つるの巣ごもり」が自主製作され、読売ホールで上映される。</p> <p>10月1日、「新曲 シカの遠音」(『文化評論』)を発表。</p> <p>10月7日、「山宣記念碑の再建」(『赤旗』)を発表。</p> <p>10月8日、長野県別所温泉安楽寺域に山宣記念碑が再建され、除幕式が行われる。タカクラ・テル・谷口善太郎・上小農民組合連合会・上田自由大学関係者ら130名が参列。</p> <p>11月20日、『狼』(日本青年出版社)を出版。</p>	
1972	47	81	<p>4月、「中江兆民・幸徳秋水など」(『日本近代文学</p>	

1973	48	82	<p>大系 月報 42』角川書店) を発表。 5 月 1 日、「箱根用水と友野与右衛門」(『日本及日本人』第 1509 号) を発表。 5 月 21 日、民族芸能を守る会第 8 回総会(台東区下谷神社)。創立 10 年を迎える。 5 月 24 日～6 月 2 日、第 2 回タシケント・アジア・アフリカ国際映画祭で、「つるの巣ごもり」が開催地ウズベク共和国平和委員会賞を受賞。 5 月 31 日、第 2 回タシケント・アジア・アフリカ国際映画祭のさい、親子映画推進連絡会からベトナム代表団に映画「つるの巣ごもり」が贈られる。 6 月 10 日、『近松から何を学ぶか?』(パンフレット) を刊行。 7 月 10 日、『唐人おきち、新曲シカの遠音、新曲さくら』(パンフレット) を刊行。 9 月 1 日、「自由大学かんけいの書簡集」(山野晴雄編『伊那自由大学関係書簡』自由大学研究会) を執筆。 11 月 14 日～21 日、共産党第 12 回党大会(目黒公会堂・品川文化会館・立川社会教育会館)。中央委員会顧問に選出される。</p>	
1974	49	83	<p>1 月 1 日、「陳情くどきー南の島の少年のなげき」(『文化評論』) を発表。 7 月 23 日、『梅若塚についてー「梅若伝説」の現代的意義』(伝統音楽研究会「きぬたの会」パンフレット) を刊行。 11 月 10 日、「梅若塚と現代」(『季刊歴史文学』創刊号) を発表。</p>	
1975	50	84	<p>2 月、『柳田国男さんと共産主義』(伝統音楽研究会「きぬたの会」パンフレット) を刊行。 4 月 23 日、『五木の子もり歌』(伝統音楽研究会「きぬたの会」パンフレット) を刊行。 6 月、日中友好協会の副会長となり、翌年、顧問となる。</p>	
1976	51	85	<p>5 月 30 日、「河上肇さんの思い出」(『信州白樺』第 21 号) を発表。 7 月 28 日～30 日、共産党第 13 回臨時党大会(立川市民会館)。</p>	
1977	52	86	<p>1 月 25 日、『でかせぎの歌』(伝統音楽研究会「きぬたの会」パンフレット) を刊行。 4 月 1 日、「でかせぎの歌」(『文化評論』) を発表。 10 月 17 日～22 日、共産党第 14 回党大会(伊豆学習会館)。中央委員会顧問に選出される。</p>	2 月 16 日、友人末川博死去(85 歳)。
1978	53	87	<p>5 月 20 日、「自由大学のこと」(『信州白樺』第 29 号) を発表。 12 月 15 日、東京労音例会、「ふきの会」公演(立川市民会館)。『新曲 さんしょう太夫』(パンフレット) を刊行。</p>	
1979	54	88	<p>10 月 7 日、東京労音例会、「ふきの会」公演(八王子市民会館)。『新曲 佐倉義民伝』(パンフレット)、 『新曲 まんざい』(パンフレット) を刊行。</p>	
1980	55	89	<p>2 月 26 日～3 月 1 日、共産党第 15 回党大会(伊豆学習会館)。中央委員会顧問に選出される。</p> <p>11 月 8 日、東京労音例会、「ふきの会」公演(立川市民会館)。『でかせぎの歌、おんど山城・国いっき、新曲「さくら」』(パンフレット) を刊行。 11 月 28 日、『蟬丸神社について』(パンフレット) を刊行。</p>	2 月 8 日、友人平野義太郎死去(82 歳)。 5 月 1 日、友人大内兵衛死去(91 歳)。

1981	56	90	<p>2月2日、「平野義太郎さんのこと」（平野義太郎人と学問編集委員会編『平野義太郎一人と学問』大月書店）を發表。</p> <p>7月20日、「恩師・新村出先生」（新村猛編『美意延年』新村出遺著刊行会）を發表。</p> <p>10月31日～11月1日、自由大学運動60周年記念集会（長野県別所温泉柏屋別荘・上田市公民館）に出席。</p> <p>11月1日、「自由大学がわたしを変えた（自由大学の生徒がわたしの先生になった）」（『自由大学運動60周年記念誌』）を發表。</p>
1982	57	91	<p>1月1日、「故郷を思う」（『高知民報』）を發表。</p> <p>7月11日、民族芸能を守る会第18回総会（台東区宋雲院）。創立20年を迎える。</p> <p>7月27日～31日、共産党第16回党大会（伊豆学習会館）。中央委員会顧問に選出される。</p>
1983	58	92	<p>2月、「ちり紙の原稿－「二・四事件」の思いで」（治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟長野支部編『歴史への証言－「二・四事件」と治安維持法』）を發表。</p> <p>10月10日、「自由大学のこと」（自由大学研究会編『自由大学運動と現代』信州白樺社）を發表。</p> <p>12月10日、「わかものたちへの絶対の信頼」（『わが人生論』高知編（上）、文京図書出版）を發表。</p>
1984	59	93	<p>3月12日～16日、東京労音例会、「ふきの会」と車人形による「唐人おきち」初演（浅草公会堂・品川公会堂・久保講堂）。</p> <p>7月、「カワカミ・ハジメ先生のこと」（『河上肇全集』月報27）を發表。</p>
1985	60	94	<p>4月10日、「序文」（上小農民運動刊行会編『長野県上小地方農民運動史』）を執筆。</p>
1986	61		<p>4月2日、午後2時30分、膝臓ガンのため昭島相互病院で死去（94歳）。</p> <p>4月4日、自宅で告別式。</p> <p>5月14日、高知県幡多郡大方町（現・黒潮町）浮鞭の墓地に納骨。</p> <p>5月18日、共産党中央委員会・長野県委員会主催「故タカクラ・テル氏を偲ぶ会」（上田市別所相染閣）開かれる。</p> <p>8月1日、遺稿「国語・国字改革運動にたいする私の態度」が日本ローマ字教育研究会主催第37回ローマ字教育全国大会（東京青山会館）において佐藤正二により朗読される。</p>

*高倉太郎「年譜タカクラ・テル」（2014年3月14日最終稿）をもとに加筆・修正を加えて作成したものです。高倉太郎氏に感謝いたします。